

第七 國語法の心髓

一 國語の構文法

(一)

言語の重要素

世界の人類の言語 (Languages) は種々あつて、少なく見立てゝも八百種以上はあると云ふ。その諸言語の組立は、始から固定してゐるものでは無く、それ々の言語の習慣によつて異同がある。しかもそれ々の言語の組立が大體定まるまでには、その前代の人々の言語が、代々を経て漸次同じ様な並べ方や仕組に落ち合つて來て、幾代も幾代も鍛錬したので、貴重なその組立方の習慣が成立つたのである。その習慣が、それ々の言語の特質である。例へば「猫」を主語とし「鼠」を目的語(客語)とし「捕」を述語とした思想を、幾多の言語において、語序は如何であるか、且つ冠詞の有無や、語尾變化の有無や、助辭添着の有無が如何であるかを比較して見よう。

(日本語)

猫が

鼠を

捕る。

(朝鮮語)

Koyag ŏa (猫が)

ŏi ŏl (鼠を)

ŏaynŏa (捕る)

(トルコ語)

Cedi (猫が)

sucani (鼠を)

ayor. (捕る)

(英) 語	<i>The cat</i> (猫が)	<i>catches</i> (捕る)	<i>the rat</i> (鼠を)
(ドイツ語)	<i>Die Katze</i> (猫が)	<i>fängt</i> (捕る)	<i>die Ratte</i> (鼠を)
(漢文)(上古の)	猫 (mao)	捕 (pu)	鼠 (shu)
(支那語)	鼠	猫	捕
(韓暲の手語)			

右の例において、日本語と朝鮮語とトルコ語、また英語とドイツ語が、その組立方において甚だ似てゐる。トルコ人は中央アジアから西遷したもので、その國語は日本語・朝鮮語などと共にウラル・アルタイ語族に屬すると云はれてゐる。Koyan と Cedi は「ねっ」に相當し、「が」に相當する。トルコ語には「が」に相當するものが缺けてゐる。日本語でも古代には助詞を缺いて「猫、鼠を捕る」とも言つたのである。tu と suan は「ねずみ」に相當し、u と i は「を」に相當する。Yapnita と alyor は「とる」に概當し、「る」が語尾變化であるやうに nita と yor が語尾變化である。英語の古代語であるアングロ・サクソン語を話した民族は、ドイツ方面から今の島へ移住したものであつて、英語とドイツ語とは、正に印度・ヨーロッパ語族のゲルマン語派に屬してゐる。その冠詞や語尾變化を比較して見れば、その近親關係が知られる。つまり、日本語と朝鮮語とトルコ語、また英語とドイツ語の如き、それ〴〵往古の思想發表の貴重な言語形式が今に傳承されてゐると謂ふべきである。

漢文の言語は謂はゆる孤立語、一名單音語であつて、その語序は特に重要なものである。

國語の特色

即ち主語、述語、客語の順序を通例とする。所が、聾啞の手語の順序は「客語、主語、述語」の順序である。尤も、この手語の順序には手つきや身ぶりも加味されるのである。さて我が日本語は、その(1)常態の順序「猫が鼠を捕る」を變じて、

- (2) 「猫が捕る鼠を。」〔英語、ドイツ語、漢文の如く〕
- (3) 「鼠を猫が捕る。」〔聾啞の手語の如く〕
- (4) 「捕る鼠を猫が。」
- (5) 「鼠を捕る猫が。」
- (6) 「捕る猫が鼠を。」

とも言ひ得るのである。斯様にして、ヴント氏が「民族心理學」の言語論において、主語 (Subjekt || S) と客語 (Objekt || O) と述語 (Verbum || V) との關係から觀た語序の六大形式 SOV, SVO, OSV, VOS, OVS, VSO, が、何等の錯誤無しに我が國語において言ひ得るのは、實に我が國語の心理的重要素たる助辭及び語尾變化の大功德である。これでこそ「言靈の幸きはふ國」または「言靈のたすくる國」と實際に稱へられるのである。

(二)

さて我が國語の常態の文においては、主語は前にあり、述語は後にあり、客語は主語と述語との中間にあり、さうして修飾語はそれ〴〵修飾される語の直ぐ上にある。但し、述

國語の常態の文の様式

語の修飾語にはその位置に三様式がある。即ち、

○美しい花が咲く。

○私は、奇妙な鳥を見た。

○花が、美しく、(述語の上)咲く。

○彼は、最早(客語の上)故郷に歸つた。

○曾て(主語の上)父が、これを我等に話した。

述語の修飾語の位置の三様式

主語、述語、客語、または修飾語が、それ／＼幾つも並ぶ場合には、その順序は、或は時や處や因果の關係の前後に従ひ、或は意味の輕重に従ひ、或は語路が流暢であるやうに順序立てるのであり、その二つ三つの事情を兼ねることもある。その諸例は、

○梅も、櫻も、藤も、牡丹も、萩も、菊も、山茶花も、水仙も、それ／＼に好い。

○第一軍は平壤を陥れて、九連城を取り、第二軍は金州城を抜きて、旅順口を占めたり。

○正成は、その子正行を、攝津の櫻井驛より、故郷の母の許へ歸らしめき。

○足引の山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかもねむ。(柿本人麿)

○明き淨き直き誠の心もちて事へまつれ。(宣命)

○汝大臣の家の内の子どもをも慈しみたまはむ、起したまはむ、尋ねたまはむ、顧みたまはむ。(宣命)

右の諸例について見ても、助辭が如何に國語の秩序を整へるために大切な機能を果してゐるかが知られる。なほ國語が變態の文をなす場合においても、やはり助辭の機能が忠實

に果される事によつて整へられるのである。それは左の如き變態の文の諸例について知られる。

一、倒置の例

春雨のふるは涙か、櫻花ちるを惜しまぬ人しなれば。(紀貫之)
しかじ、うき世をいとひ、まことの道に入りなむには。(平家物語)

二、省略の例

君が代は、千代に八千代に、さゞれ石の巖となりて、苔のむすまで……。(古歌)
目には青葉……山ほとゝぎす……初がつを……。(山口素堂)

三、感動または呼掛または命令などの例

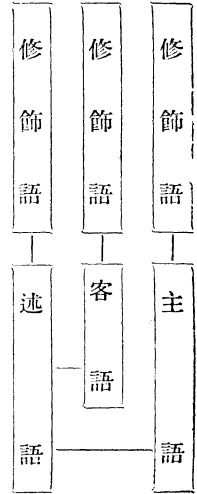
皆人は花の衣になりぬなり、苔の袂よ、かわきだにせよ。(僧正通昭)
手をついて歌申上ぐる蛙かな。(山崎宗鑑)

四、掛詞の例

これはく^とば^{かり}花^のよし^の、好^しの、吉野山、(安原貞室)
立ち別れいな^ば往^なば、因幡の山の峯におふるま^つ、(松待つ)とし。聞かば、今かへり來む。

(在原行平)

國語の常態の文の構成は、左の如き形式を以て、主語と述語と客語と修飾語との四成分の位置を大略示し得るものである。



右の如き形式において、場合により修飾語の一乃至全部を要しないこともあり、また客語を要しないこともある。變態の文の場合には、思想の必要素たる主語もしくは述語さへ略されることもある。とにかく右の如き一の形式を最大限のものとして、その範圍内の構成のものを單文とよぶ。さうして右の形式の内の或成分に當るものが、文の中の文即ち節を含む場合には、主節と從節との關係を成し、複文とよばれる。さうして單文もしくは複文が、二もしくは三以上聯つた場合には、並立節を成し、重文とよばれる。思想の文の構成は、通例右の三種類として説かれる。副詞的の節を持つ複文を特に「合文」とも云ふ。

二 國語の品詞法

國語法において、「花 さく」「雪 は 白い」の如く、一つ一つの意味をあらはすものを單語とよぶ。單語を意味・形式及び職能から分類したものを品詞とよぶ。

名詞と數詞
と代名詞

花さく。雲は白い。水戸黄門は大日本史を著す。

の如き(太字の)詞は、人または物事の名をいひあらはすもので、名詞とよばれる。

一から十まで。一等に選ばれた。九萬の鵬程。

の如き(太字の)詞は、數の分量または順序をいひあらはすもので、數詞とよばれる。

吾輩は猫である。彼こそ偉人だ。君はどこに居る。

の如き(太字の)詞は、名詞に代用されるもので、代名詞とよばれる。

名詞・數詞及び代名詞は、おもに主語または客語として用ひられ、人または物事の體を言ひあらはす品詞であり、總稱して體言とよばれる。

花さく。水戸黄門は大日本史を著す。勳功が有る。

の如き(太字の)詞は、人または物事の動作や存在をいひあらはすもので、動詞とよばれる。

心が善い。雪は白い。義は泰山よりも重い。

の如き(太字の)詞は、人または物事の性質や状態をいひあらはすもので、形容詞とよばれる。「静かだ」「愉快だ」の如きは、形容動詞とよばれて、意味の上からは形容詞に、語形の上からは動詞に附説されてゐる。

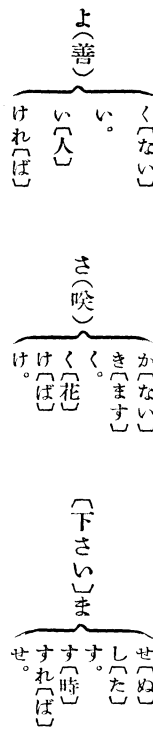
動詞・形容詞及び形容動詞は、おもに述語として用ひられ、體言について何かを語る品詞であり、總稱して用言とよばれる。

動詞と形容
詞

花がさきます。花を咲かせます。雪が降るらしい。

の如き(太字の)詞は、おもに動詞の下に添ひ、これを助けて種々の意味をいひあらはすもので、助動詞とよばれる。

形容詞と動詞と助動詞とは、左の如く語尾の變化する特質をもつてゐる。



語尾の變化することを活用といふ。活用は文語と口語とによつて異同がある。その活用の種類及び活用形の詳細は、附録の諸表に示す。

高い山が見える。燕は速く飛ぶ。遊ぶ暇がない。枯れた枝に鳥がとまる。

の如く、形容詞と動詞と助動詞は、修飾語としても用ひられる。

これが最も良い。病氣が必ずなほる。黒船が突然浦賀に來た。

の如き(太字の)詞は、形容詞や動詞の意味を限定するもので、副詞(修飾語の一種)とよばれる。

山また山。書を読み、かつ字を習ふ。日限がきた、しかしまだ返事がこない。

の如き(太字の)詞は、語や文をつなぐもので、接續詞とよばれる。

あ、うれしい。おや、これは大變だ。さて、目あきは不自由なものだ。

助詞

の如き(太字の)詞は、物事に感動した時に發するもので、感動詞とよばれる。

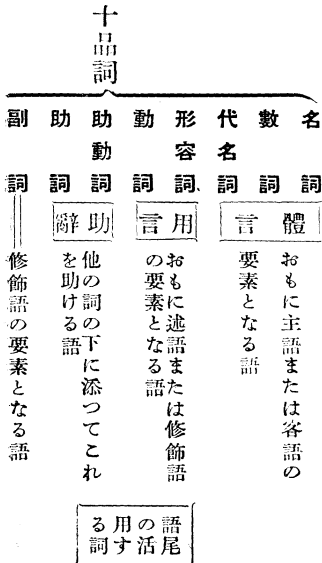
山の上。月を見る。雪は白い。胸が勇めば花が散る。

の如き(太字の)詞は、他の詞の下に添ひ、これを助けて種々の意味をあらはすもので、助詞とよばれる。

助詞及び助動詞は、他の詞の下に添つて之を助ける職能をもつもので、總稱して助辭とよばれる。助辭は、富士谷成章が「あゆひ」(脚結)と名づけたもので、我が國語の重要素であるから、よくこれを學習すべきである。

以上の通り、國語の單語は十品詞に分たれる。但し、數詞を名詞の中に入れて九品詞とする説き方などもある。

十品詞



接續詞——語や文をつなぐ語
感動詞——特に感動をあらはす語

まづ文章と品詞との關係を解いたから、つぎに國語法の心髓たる助辭を解説する。

三 助辭の解説 (二)

國語の助辭

漢文において最も難儀な所は、謂はゆる「介字」や「助字」にある。西洋語においても、格(Case)や前置詞や助動詞の用ひ方は甚だ面倒である。まして我が國語においては、漢文や西洋語のそれらに比べて遙かに複雑な發達をしてゐる助辭即ち「あゆひ」の學習が容易でないことは云ふまでもない。まづ助詞から説いて後に助動詞を説かう。

助詞の分類

かねて先輩の所説を參酌して、他の品詞との形式上並に職能上の關係から見ても、助詞を四種の分類に整へたものを、書物として初めて出したのは、大正十五年發行の中等新國文法においてである。さうして西歷一九二八年即ち昭和二年にオックスフォード發行、英人サンソン(G. B. Sanson)氏の“An Historical Grammar of Japanese”(日本語の歴史的文法)において、助詞(particles)を(1) Case—(2) Adverbial—(3) Conjunctive—(4) Exclamatory—に分類してゐるのを読み、大體において分類の一致してゐるのを喜ばしく思つた。

第一類

【第一類】體言または準體言の下にそひ、主として標識をあらはす助詞

第一類の助詞は「格助詞」とも呼ばれ、西洋語などでは語尾屈曲もしくは前置詞を以て表はすのである。これをラテン語のケースに概當して見れば、「が」は「主格」、「の」は領格、「を」は賓格、「に」「へ」「まで」は與格、「より」「から」「にて」「で」は奪格と云ひ得るのである。

左にサンナム氏の譯例を引いて、日英兩語を對照して見よう。

やまとの國。 *The land of Yamato.*

大納言が父。 *The Dainagon's father.*

智なきが多し。 *Those without wisdom are many.*

この花は白し。 *This flower is white.*

水を飲む。 *to drink water.*

道を行く。 *to go along a road.*

東京に住む。 *to live at Tokyo.*

東京へ行く。 *to go to Tokyo.*

木となる。 *It becomes a tree.*

吾汝と彼を訪はむ。 *I will visit him with you.*

支那より歸りて。 *returning from China.*

これより高し。 *It is higher than this.*

がとはと徒

九時^{まで}で眠る。 to sleep until nine o'clock.

がとはと徒 漢文や英語の形式は、主格と賓格とを言ひわけないのが常であるのに、我が國語では之を言ひわければかりでなく、主格に「が」と「は」との使ひわけさへある。例へば「花^が咲く」「花^は咲くけれども、實^はならぬ」などの如く、「が」は物事を専らに言ひ、又は強めて言ひ、「は」は他に對して區別する意をふくむのである。その用ひ方には種々の使ひわけが有つて、簡單に説き去るわけには行かない。ある方言の中には、標準語における用ひ方と反對にしてゐるのさへある。外國人などは頗るこの助詞の學習に苦しむのである。文語では「花^{咲く}」「花^{咲けども}、實^{ならず}」とも云ふのは、格をあらはす助詞の無いもので、係結法では「徒^の係」と呼んでゐる。「徒^の係」は古代語の一形式であり、後世では「徒^の係」がすたれて「が」又は「は」の助詞が充當されるに至つたのは、語法の發達によるのである。更に「が」と「は」との使ひわけに就いて説明すれば、

(一) 私が行く。(人に任せず、私自身^が)

私は行く。(他の人は行かぬかも知れない^が)

(二) 櫻の花^が五月頃咲く。(特に五月頃^に櫻花の咲くことを示す)

櫻の花^は四月頃咲く。(一般に櫻花の季節^を説き示す)

(三) これ^が好い。(絶對的に又は特別に好いことを示す)

これは好い。(相對的に又は比較的、に好いことを示す)

(四) 春が來た、春が來た。(冬が既に去つて春となつたの意)

春は來たが鶯の聲を聞かない。(季節と生物との遅速を比べて云ふ意)

春が來たのに鶯の聲を聞かない。(前項の意味を強めて、春が來たのに未だ鶯の聲を

聞かないと云ふ意)

五 春は暖い。冬は寒い。(夏は暑いなどと比較して、)

この春は餘寒が強い。(例年の春に比較して、)

六 鶯が梅の木に鳴いてゐる。(現に梅の木に鶯の聲を聞くの意)

鶯はホーホケキョーと鳴く。(一般に鶯の鳴き聲を説き示す)

鶯は鳥類である。(獸類や魚類や蟲類では無くて)

また「私は茶が飲みたい」「私は茶は飲むが、酒は飲まぬ」の如く、「が」又は「は」が賓格の「を」に代り且つ強めて言ふ場合もある。その場合の兩者の意味の差異は、主格の場合の意味の差異と共通點を持つ。なほ「が」は次に説く領格の助詞の發展したものである。

のとつとが

のとつとが この三つは、謂はゆる領格をあらはす點において共通である。古語の「天

つ神」「沖つ白波」の如きは、「天の神」「沖の白波」と同義であり、「天が下」「賤が屋」の如き

も、「天の下」「賤の屋」と同義である。但し、「つ」は古語で、合成名詞を形造る場合に用ひ

られ、「が」は「鳥が鳴く」「智無きが多し」の如く主格に發展し、「の」は領格として普通に用

ひられるが、又「雨の降る夜」「性質の善い人」「稻葉よそぎて秋風の吹く」(古今集)の如く主格にも發展した。「の」の主格は、多くは從節に用ひられる。又「飛行機の飛ぶの」(速度)は早い「の」の如く、「の」が名詞に代る場合もある。領格の助詞に種々の意義があり、例へば「日本の(所有)領土」「故郷の(所在)父母」「至誠の(性質)人」「正宗の(由來)名刀」「髮切の(と云ふ)刀」「露の(比喻)命」「沖つ(所在)白波」「誰が(所有)袖」「蝦夷が(所在)千島」などと云ふ。固有名詞の「玉津島」「關ヶ原」「江之島」の如きは、領格の助詞を含むものである。

をとに「花を見る」「水を飲む」「人に語る」「故郷に歸る」「子供が鯉に、鯨をやる」の例の如く、「を」は賓格をあらはし、「に」は與格をあらはす。斯様な例において「を」は他動詞に連なり、單用の「に」は自動詞に連なるのである。しかし時としては、「を」を「に」または「から」の意に似通はせて、

- (甲) 人が海を泳ぐ。 鳥が空を飛ぶ。 人が山を下りて来る。
 (乙) 人が海に泳ぐ。 鳥が空に飛ぶ。 人が山から下りて来る。

などと云ひ、自動詞に連なる場合もある。尤も、自動詞並に他動詞といふのは、西洋語のそれに擬したことであり、彼我の語性が異なる所から云へば、自他の立て方も異なるわけである。まづ「泳ぐ」「飛ぶ」「下りて来る」の如きを文法家や辭書家が普通に云ふ自動詞とし

て、(甲)の「を」と(乙)の「に」や「から」との意味の差異は如何と云ふに、「を」は動作の進行を示し、「に」や「から」は動作の行はれる場所の限定を示す。

「に」には種々の意義があり、「人に(相對)語る」「故郷に(場所)住む」「東の方に(方向)行く」「午前七時に(時限)立つ」「花見に(所志)行く」「議員に(資格)なる」「これに(比較)まさる」「善人に(轉化)なる」「鳥の聲に(原因)目ざめたり」「梅に(添加)鶯」「己が心に(指示)思ふ」の如き例を擧げられる。なほ尊敬すべき主語をあらはすために「に」と「は」とを合成して「陛下には京都に行幸あらせられたり」の如くいふこともある。

へとに 通例、文語では「都へ向ふ」「都に着く」「住む館より出でて舟にのるべき處へわたる」(土佐日記)の例のやうに、「へ」は動作の行はれる方向を示し、「に」は動作の行はれる場所を示すのであるが、口語ではこの差別を混同してゐる。尤もこの混同は、古くから「に」を幾分か方向にも用ひて「東の方に行きて」(伊勢物語)などと云つた所から、漸次さうなつたものである。しかしこの二つは、「東京へ參ります」「東京に參りました」の例のやうに、方向と場所との差別をして口語にも善用する方が便利である。

よりとから 「より」は、「東より(起點)出づ」「門の前より(經由)行く」「正午より(時限)始む」「酒は米より(由來)造る」「馬より(方法、にての意)行く」(萬葉集)「山より(比較)高

し「これより(制限)外なし」の如く用ひられ、「から」も古くから「より」と同義に用ひられることが幾らか有つて、後世ほど共通に用ひられることが多くなつた。同時に「より」の使用は漸次減少したけれども、「比較のより」と「制限のより」とは、今も「から」とは區別し、「方法のより」は古語に止まり、後世では「馬にて(で)行く」と云ふのである。

まで

まで「東京より大阪まで」(終點)、「午前八時から午後四時まで」(時限)の如く、始終兩端をあげて云ふ外に、始を略して「大阪まで行く」「午後四時まで勤める」「遠くまで聞える」「遅くまで働く」「後世に至るまで尊ばれる」なども云ふ。

と

と「友と(共同)語る」「東京を帝都と(資格)奠む」「木が化石と(轉化)なる」「彈丸が雨と(比喩)飛ぶ」「敵艦見ゆと(指定)報ず」「月と雪と花と(列擧)を賞する」の如く、種々の意義に用ひられる。列擧の場合に終の「と」を省いて差支なければ、「月と雪と花を賞する」の如く云つて可い。しかし終の「と」を省いては誤解の起る場合には、之を存置せねばならぬ。例へば、

古今集と新古今集との四季の部を読む。

古今集と新古今集の四季の部とを読む。

にてとて

にてとて「ロンドンにて(場所)會議す」「三年にて(時限)卒業す」「大風にて(原因)家倒

る「毛筆にて(方法)字を書く」「大臣にて(資格)おはす」の如く、種々の意義に用ひられる。「にて」は文語であり、之を口語では「で」といふ。

印度・ヨーロッパ諸國語においては「格」をあらはすのに、語尾屈曲もしくは前置詞を以てするのであるが、我が國語では第一類の助詞を用ひる。さうして「後置詞」の名は、彼の「前置詞」の對稱であつて、狭くは第一類の助詞の別名とし、廣くは他の助詞をも含めて云ふ。

その他

なほ第一類の助詞に屬するものに、左の例のやうなものがある。

ロンドンにおいて(に)聞く。

筆もて(に)字を書く。 刀して(に)切る。

鯨は歌にして(に)海にすむ。

義經をして(に)討たしむ。

四 助辭の解説 (三)

第二類の助詞

【第二類】 種々の言の下につき、主として程度または限定をあらはす助詞

第二類の助詞は、「副詞的助詞」または「副助詞」とも呼ばれ、西洋語などでは通例は副詞を以て表はされるものである。左にサンナム氏の譯例を引いて、日英兩語を對照して見よう。

ぞとなむとこそ

これも玉なり。
これこそ玉なれ。
風吹けばこそ船出させられ。
その名だに知らず。
色さへ移るひにけり。
我のみ行かむ。
花と見るまで。

This also is a jewel.
This indeed is a jewel.
Because the wind blows the boat is not put out.
I do not know even his name.
The colour also faded.
I alone will go.
as far as seeing them as flower.

ぞとなむとこそ 三つ共に強めの助詞であるが、その中でも「こそ」は最も強いのである。さうして、

鳴く鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき(猿丸太夫)
人麿なむ歌のひじりなりける(古今集の序)
さる人こそさやうには悩むなれ(源氏物語)

といふやうに、上の助詞が「ぞ」や「なむ」であれば、下の用言を連體形で結び、上の助詞が「こそ」であれば下の用言を已然形で結ぶのが古文の係結法である。しかし時としては、

例の作法に行はせ給ふとぞ(聞く)(大鏡)
前の世ゆかしうなむ(思ほゆる)(源氏物語)
かたはなるべきもこそ(あらめ)(同)

といふやうに、係の下部の略されることがある。斯様な係結法が規則正しく行はれたのは

王朝時代の事である。近古以後には段々と係結法が簡易化されて、一様に終止形を以て、結ぶ方へ進んできた。それで口語では、「ようこそお出で下さいました」「これこそは事實でございませう」の如く云ふのである。「ぞ」と「なむ」は口語に用ひない。

し 「し」は、意味を強め又は語調を整へるために、「散るを惜しまぬ人しなければ」(古今集)、「花をし見れば物思ひもなし」(古今集)、「今し羽根といふ所にきぬ」(土佐日記)、「范蠡無きにしも非ず」(太平記)などの如く用ひる。また口語には一種の用ひ方が有つて「鷺は白いし、鳥は黒い」「夏は暑いし、冬は寒いし、春秋は中和だ」「子供でもあるまいし、しつかりしなさい」などと云ふのは、接續の職能を持つてゐる。

もとは 「も」は「富士山よりも(強め)高い」「弟も(添加)來た」「北國では梅も櫻も(列擧)一時に咲く」「出席するにしても(假定)遅れる」などの如く種々の意を表はす。「も」と「は」とは、左の如く相對的に用ひられる。

(一) 新高山は富士山よりも高い。(無論、御嶽などよりも高く)

新高山は富士山よりは高い。(エヴェレスト山などよりは低い)

(二) 弟も來た。(兄又は他の者も來たが)

弟は來た。(兄又は他の者は來なかつたが)

(三) 梅も櫻も一時に咲く。(寒地であるので)

もとは

し

梅は咲いたが、櫻はまだ咲かぬ。「追々に咲くので」
(四) 出席するにしても遅れる。「と豫め斷りをする」
出席するに於ては餘り遅い。「何の斷りも無くて」

斯様なわけであるから、「は」を全部第二類の助詞に入れる説き方もあり、また(一)と(四)との如く副詞的に用ひられる「は」だけを第二類に助詞とし、(二)と(三)との如き「は」をば第一類の助詞とする説き方もある。

だにとすら
とさへとて
も

だにとすらとさへとも 凡そ文語では、「だに」と「すら」は軽い方即ち消極の方を擧げて、他の重い方即ち積極の方を察しさせるのに用ひることが多く、「さへ」はその反對に用ひることが多い。しかし口語では、かやうな差別がすたれて、その代りに「さへ」「でも」又は「まで」などを用ひる。例へば、

一文字だに知らぬ者しが。一文字さへ知らぬ者までが。

散る間をだにも見む。散る間をなりと見よう。

禽獸すら恩を知る。禽獸でも(で)き(こ)恩を知る。

行方すらも分らず。行方さへも分らない。

親の名さへ揚ぐべし。親の名までも揚げられる。

また「だに」と「すら」を重ねて大いに意味を強めた例もある。

物いはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるかなや、親の子を思ふ。(金槐集)

また「さへ」を漸層的に用ひた例は、

橋は實さへ。花さへ。その葉さへ。枝に霜おけど、いや當葉の木(萬葉集)

のみとばかりとだけとほどとくらゐとしかとほかときり 文語では「要點のみを説くべ

のみとほか
りとだけと
ほどとくら
ゐとしかと
ほかときり

し」「こればかりは他に渡さじ」などと云ひ、「のみ」と「ばかり」とを同義に用ひるが、口語では「のみ」はすたれて「ばかり」と「だけ」とを類義に用ひる。但し多少の出入が有り、「ばかり」を「ほど」又は「くらゐ」の意にも用ひて「二十ばかり」「幾らばかり」などと云ふ。「ばかり」と「だけ」は肯定の場合にも用ひるが、「しか」は「これしか無い」「五人しか乗れぬ」などの如く、後に必ず打消の語が來るのである。「しか」と同様に用ひる助詞に「ほか」がある。「きり」は「それきりになつた」「昨年行つたきりだ」などの如く用ひる。これらの多くは「計、丈、程、位、外、切(限)」の如き漢字でも記されるやうに、名詞などから程度または限定を表はす助詞に轉用されたものである。

などとやとやらとなり 「など」には凡そ二種が有つて、(イ)等類を示し、または(ロ)大概を示すことは、左の例の如くである。

などとやと
やらとなり

(イ)櫻や桃などいろくの花が咲く(このなどは、櫻や桃の外に他の花樹もあるの意)

(ロ)まだ月などが出てゐるものか(このなどは、物事を大まかにさすの意)

「や」は疑の「や」の轉用で、物事を大概に列舉し、「やら」は「やあらむ」の省略の轉用で、物事を大概に列舉し又は不確定にあらはす場合に用ひる。例へば、

鯛やひらめの舞ひ踊り。

好いのや悪いのやいろくある。

鯛やらひらめやら踊つてゐる。(大概に列舉する「やら」)

何を言ふのやら分りません。

うれしいやら笑つてゐる。(不確定の「やら」)

「なり」は指定の助動詞の轉用で、多くは物事を列舉して無選擇の意を示す。例へば、

山へなり海へなり行かう。(なりにとを附けてなりとも云ひ、又方言に之を約してなりとも云ふ)

とも云ふ)

誰となり四五人行かう。

梨を皮なりたべる。(このなりはそのまゝの意)

どころ

「どころ」は、或る事態をあげて、その意外であることを示す。例へば「それどころの話ではない」「ぬるいどころか熱いくらゐだ」「返さないどころか斷りも言はない」などの如きである。この助詞は名詞の「所」の轉用で、略しては「どこ」とも云ふ。

その他

なほ、第二類の助詞に屬するものに、左の例のやうなものもある。

うづまきは神とも神ときこえくる。(日本紀)

ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬ。(古今集)

すめろぎの出でましのまに。(萬葉集)

まかで侍るままなり。(源氏物語)

後手にふきつつ逃げ來ます。(古事記)

日は照りながら雪の頭にふりかゝりけるを。(古今集)

物々しやと云ふままに。(狂言記)

弓なりと鎗なりと鐵砲なりと持て。(狂言記)

左傳にもある通りおれを侮つてどうもならぬ。(膝栗毛)

御兩親様始め皆々様には御機嫌宜しいか。

この手紙着き次第御返事を下さいます。

五 助辭の解説 (三)

【第三類】 用言の下につき、主として文句の接續をあらはす助詞

第三類の助詞は「接續助詞」または「接續助詞」とも呼ばれ、西洋語などでは通例は接續詞を以て表はされるものである。左にサンソム氏の譯例を引いて、日英兩語を對照して見よう。

天氣好ければ行くべし。

As the weather is good, I shall go.

ばとならと
ととからと
のととたら

天氣好くば、行かむ。

If the weather is good, I shall go.

死なうとも、かまはぬ。

Even if I die, I don't care.

甲有れど、乙無し。

Though there is A, there is not B.

雨降るを、傘無しに出づ。

He goes without an umbrella, although it is raining.

しばく訪ひたるが、面會を得ず。*Though I called several times, I could not get an interview.*

本を讀むと、頭痛がする。*When I read a book, I feel a headache.*

ばとならとととからとのととたら 「ば」は第二類の「は」と同原の「は」の濁りて、區別の意をふくむ接續助詞である。文語では、「ば」を用言の未然形に添へて假定をあらはす場合と、「ば」を用言の已然形に添へて既定をあらはす場合とある。例へば、

天氣好く(未然形)ば遠足せむ。

假定

雨降ら(未然形)ば延期とせむ。

假定

天氣好けれ(已然形)ば遠足す。

既定

雨降れ(已然形)ば延期とす。

既定

口語では、右のやうな未然形と已然形との用法がすたれて、已然形が既定をあらはす外に、假定をあらはす方が多くなつた。それで文語の已然形を口語では假定形と云ふ。けれども條件形といふ方がふさはしい。また口語では、用言の終止形に「なら」又は「と」を添へて假定をあらはし、同形に「から」又は「ので」を添へて既定をあらはす。例へば、

天氣が好い(終止形)なら遠足しよう(又は遠足する)

雨が降る(終止形)と延期しよう(又は延期する)

天氣が好い(終止形)から遠足する。

雨が降る(終止形)ので延期する。 (既定)

つまり、口語の假定形といふものが同様に用ひられるので、之を明かにする他の形式が別に發達したのである。今一つ「たら」は、動詞、形容動詞、又は動詞に似た活用の助動詞の連用形に添ひ、用ひ方によつて假定ともなり既定ともなる。例へば、

水を飲ませ(連用形)たら、おちつくだらう(假定)

よく言つて聞かせ(連用形)たら得心した(既定)

ともとも
とと

ともともとと この三つは、假定の條件をあらはす助詞であるが、「とも」は文語に「ても」は口語に用ひ、「と」は文語にも口語にも用ひる。さうして「とも」は、動詞、形容動詞、又は動詞に似た活用の助動詞には終止形に添ひ、その他の用言には連用形に添ふ。「ても」は、すべての用言の連用形に添ふ。「と」は、古文では動詞の終止形に添ふ例があるが、口語では未來の助動詞の終止形に添ふのである。例へば、

(文)之を省略す(終止形)とも妨なし。

(口)之を省略し(連用形)ても妨ない。 (相等しい)

どとどもと
けれどとけ
れども

がとものか
らともの
とともの
もととの
に

(文)苦しく(連用形)とも忍耐すべし。
(口)苦しく(連用形)でも忍耐せよ。 (相等しい)

(文)繪にかく(終止形)と筆も及ばじ。

(口)繪にかかう(終止形)と筆も及ぶまい。 (相等しい)

(口)鬼が出よう(終止形)と何が出ようと恐れない。

どとどもとけれどとけれども この四つは、相等しく既定の條件をあらはす助詞である

が、「ど」ども」は文語で、用言の已然形に添ひ、「けれど」「けれども」は口語で、用言の終止形に添ふ。

(文)相手かはれ(已然形)どぬしはかはらず。

(口)相手はかはる(終止形)けれどぬしはかはらぬ。 (相等しい)

(文)物は薄けれ(已然形)ども志は厚し。

(口)物は薄い(終止形)けれども志は厚い。 (相等しい)

がとものからとものをととものもととのに この七つは、前條の四つの助詞と似た意味の助詞であり、文語では用言の連體形に添ひ、口語では用言の終止形と同形の連體形に添ふ。例へば、

(文)空晴れたる(連體形)が風寒し。

(口)空は晴れた(終止形)が風は寒い。 (相等しい)

(文)折角來れる(連體形)ものから。またはもの。斯くてはせん方なし。 (相等しい)

(日)折角來た(終止形)もの。これでは仕方がない。

(文)約束したりし(連體形)をいかで來らざりし。 (相等しい)

(日)約束しておいた(終止形)ものをなせ來なかつた。 (相等しい)

(文)友人を訪ひし(連體形)に、旅行中なりき。

(日)友人を訪うた(終止形)のに、旅行中だつた。 (相等しい)

てとて

てとて 「て」は、時の助動詞の「つ」の連用形を轉用した助詞であり、用言の連用形に添

つて時の経過を示し又は物事の對比を示す。例へば、

(文)春過ぎ(連用形)て、夏來れり。(口)春が過ぎて、夏が來た。

(口)鳥は黒く(連用形)て、鶯は白い。

「で」「すて」の約を轉用した文語の助詞であり、動詞、助動詞、または形容動詞の未

然形に添つて打消の接續を示す。口語では之を「なくて」(助動詞と助詞)などと云ふ。例

へば、

(文)風吹か(未然形)で、海靜かなり。

(口)風が吹か(未然形)なく(連用形)て、海が靜かだ。 (相等しい)

なほ第三類の助詞に屬するものに、左の例のやうなものがある。

さういふ事をしようものなら大變だ。

その他

約束を破るからは、すておけない。
 今頃来たところ、が、まにあはぬ。
 むづかしい。たつて、考へればできる。

六 助辭の解説 (四)

第四類の助詞

【第四類】 語句の下につき、主として感歎や命令や願望や疑問をあらはす助詞
 第四類の助詞は「感動詞的助詞」または「感動助詞」とも呼ばれ、西洋語などでは感動詞を以て表はされることが少からぬものである。左にサンソム氏の譯例を引いて、日英兩語を對照して見よう。

- | | |
|-------------|---|
| 八千矛の神の命や。 | <i>O! August Deity of the Miriad Spears</i> |
| 天なるや。弟棚機。 | <i>O! Weaver in the Sky.</i> |
| 來鳴きてよ。 | <i>Come and sing!</i> |
| その八重垣を。 | <i>O! that manifold fence!</i> |
| 花は散らむな。 | <i>Ah! the flower will fade!</i> |
| な刈りそね。 | <i>O! do not reap!</i> |
| 世の中は常かくのみか。 | <i>Is the world always only thus?</i> |
| 田鶴鳴くへしき。 | <i>Will the stork cry?</i> |

やとよ

やとよ 「や」と「よ」とは、左の例のやうに、感歎、呼掛、又は命令をあらはす助詞であり、用言には終止形（文語では「よ」は連體形に）または命令形に添ふ。

かしこし（終止形）や。枕草子

なほもてこ（命令形）や。（源氏物語）

こけの袂よ、かわきだにせ（命令形）よ。（古今集）

身をつみてだに人の知らぬ（連體形）よ。（拾遺集）

四段とナ行變格とラ行變格との活用には、命令形に「よ」を添へないで命令をあらはすのであるが、しかし餘情をあらはすために「よ」又は「や」を添加する場合もある。また第二、第三の係の結に「や」を添加する場合もある。例へば、

忘れで待ちたまへよ。（源氏物語）

聲たえず鳴けや。鶯。古今集

いみじくぞ（係）ある（結）や。（枕の草子）

仕うまつりにくき宮仕にこそ（係）あれ（結）や。（源氏物語）

かなとかも

かなとかも 「かな」「かも」は、文語で感歎をあらはす助詞であり、用言には連體形に添ふ。例へば、

いたましき（連體形）かな、分斷の荒き浪。（平家物語）

さても嬉しく對面したる（連體形）かな。（大鏡）

梅の花かと打見つる(連體形)かも。(萬葉集)

「かな」は「か」と「な」との合成で、「かも」は「か」と「も」との合成であり、それごとく一つだけでも感歎をあらはす。例へば、

白露を玉にもぬける春の柳か。(古今集)

うらみつべし(終止形)な。(後撰集)

山のまに／＼鶯鳴く(終止形)も。(六帖)

やとか この二つは、共に疑問をあらはす助詞となるが、「や」は用言の終止形に添ひ、「か」は用言の連體形に添ふ。口語では「か」だけであつて、終止形に添ふ。例へば、

(文)故障有り(終止形)や無し(終止形)や。

(口)故障有る(連體形)か無き(連體形)か。

(口)故障が有る(終止形)か無い(終止形)か。

(相等しい)

サンソム氏は疑問の「や」「か」を副詞的助詞として第二類に入れた。さて「や」「か」又は「いかが」「いかにか」の如き疑問の語が文の中で係となる場合には、その結の用言に連體形を用ひる。例へば、

春やとき花やおそきと聞きわかむ。(古今集)

今か咲くらむ山吹の花。(新古今集)

こゝちはいかがおぼさるゝと問へば。(竹取物語)

また右の諸語が反語となる場合もある。例へば、

咲かざらば、櫻を人の折らまじや。(後拾遺集)

誰れか。この世を頼みはつべき。(伊勢物語)

君の仰せごとをい。か。いはそむくべき。(竹取物語)

やはとかは

やはとかは この二つは、「や」又は「か」に「は」の合成した文語の助詞であり、反語をあらはす。それが文の中で係となる場合は、その結の用言に連體形を用ひる。例へば、

われ、巖に劣らまし(終止形)やは。(古今集)

誰もつひにはとまるべき(連體形)かは。(千載集)

そこひなき淵やは騒ぐ(連體形)。(古今集)

いつかは雪の消ゆる時ある(連體形)。(古今集)

ばやとなむ

となとねと

がとがもと

がな

ばやとなむとなとねとがとがもとがな この七つは、願望をあらはす文語の助詞である。その前四つは、動詞、形容動詞、または動詞に似た活用の助動詞の未然形に添ひ、後三つは、助詞の「も」又は時の助動詞の「し」「てし」「にし」の下に添ふ例である。例へば、

(1)心あらむ人に見せ(未然形)ばや。(後拾遺集)

(2)二條院へおはしまさ(未然形)なむ。(源氏物語)

(3)救ひたまは(未然形)な。(佛足石の歌)

(4)一目見に來(未然形)ね。(萬葉集)

(5) 老いず死なずの薬もが。(古今集)

(6) 常にもがもな常處女にて。(萬葉集)

(7) 早くうき世を離れにしがな。(夫木集)

右の(1)の「ばや」は、第三類の「ば」と第四類の「や」との合成であり、(2)の「なむ」は、(3)の「な」と「む」との合成である。その「む」は感歎の「も」と同原で、萬葉集に「見らにあはなも」の例もある。(3)の「な」と(4)の「ね」とは、感歎のものと同原であり、しかも未然形に添ふのが願望のものの特徴である。(6)の「がも」は、(5)の願望の「が」と感歎の「も」との合成であり、(7)の「がな」は、(5)の「が」と感歎の「な」との合成である。(6)の「も(感歎)がも(願望)な(感歎)」の如きは、複雑な聯結である。

かし

かし これは念をおして強める文語の助詞であり、用言には終止形や命令形などに添ふ。

やがて尼になりぬ終止形かし。(源氏物語)

たよりだになくぞありける連體形かし。(同)

光こそまさりたまへ(已然形)かし。(同)

もとめても問ひきけ(命令形)かし。(同)

御志のあやにくなりしぞ(助詞)かし。(同)

なとなそ

なとなそ 禁止をあらはす「な」は、動詞、または動詞に似た活用の助動詞の終止形に添ふ。但し、「有り」の如きラ行變格の語には連體形に添ふ。例へば、

玉取りえずば歸り來(終止形)な。(竹取物語)

これいたづらになし給ふ(終止形)な。(源氏物語)

心のまゝなるふるまひなどもせらる(終止形)な。(同)

御油斷ある(連體形)な。

「な―そ」といふ文語の禁止の助詞は、動詞、または動詞に似た活用の助動詞の連用形をはさむ。但し、カ行變格とサ行變格との動詞においては、左の如くその未然形をはさむ。

あたりよりだにな(あり)き(連用形)そ。(竹取物語)

吹く風をな(來)未(未然形)然(形)そ(の)關(と)思(へ)ども。(千載集)

さ(な)せ(未)然(形)そ(そ)こ(な)ふ(な)。(枕草子)

萬葉集には「雲なたなびき」などと「そ」を添へない用ひ方もあるのに據つて考へると、「そ」は「それ」と指定して強めるもので、口語で「いけないぞ」などといふ「ぞ」も同原であらう。平安朝には「雲たなびきそ」(古今六帖)といふ用ひ方も出來てゐる。

なとなあとねとねいとのとう これらは餘情をあらはすための助詞で、用言には終止形に添ふ。例へば、

花の色は移りにけり(終止形)な。(古今集)

寺々の鐘つく奴は憎い(終止形)な。(狂言記)

打開いた景のよい庭ぢや(終止形)な。(同)

なとなあと
ねとねいと
のとう

その他

苦勞性だ(終止形)ね。(浮世床)

いい氣味だ(終止形)ねい。(浮世風呂)

ちと見たい(終止形)。(狂言記)

おうらやましい(終止形)のう。(浮世風呂)

なほ第四類の助詞に屬するものに、左の例のやうなものがある。

あれはさぶし(終止形)。(萬葉集)

何の數でござりや(終止形)。(浮世床)

渡守、船渡、せ(命令形)をと、呼ぶ聲の。(萬葉集)

風あらくしう吹きたる(連體形)は。(源氏物語)

痛さがたまらん(口語では終止形と連體形と同じ)はいな。(浮世床)

かくるゝまでに顧みし(連體形)はや。(拾遺集)

やるまい(終止形)ぞ。(狂言記)

うちはどこぢや(終止形)ぞい。(膝栗毛)

本の咄だ(終止形)せのう。(浮世床)

かゝる夜の月に、心やすく夢みる人はある(連體形)ものか。(源氏物語)

誰が持てと云ふ(口語では終止形と連體形と同じ)もんか。(浮世風呂)

道理か、油ぎつとると思うた(終止形)て。(同)

芋といふ物をうゆるか。おおなかくうゆる(終止形)とも。(狂言記)

(附言) 助詞には「ガ、ノ、ニ、ヲ、ハ、モ、ト、ド、カ、ヤ」などの如く發達の古いものがあり、

「ドコロ、ホド、クラキ、キリ」の如く後に他の品詞の轉用されたものもある。また助詞の四類の中には、左の例の如く、一類から他類に互つて轉用されてゐるものもある。

が
第一類 花が咲く。行きたいが山々です。
第三類 本は讀むが覺えてゐない。そこも痛い。こゝも痛い。

第四類 笛の音が聞えようがなあ。
第一類 私は知りませぬ。見るのはかまはぬ。

は
第二類 あの山は、餘り高くはない。

第三類 雨が止めば、はの濁出かけよう。
第四類 これは重いは。

から
第一類 燕は南の方から来る。
第三類 彼は勉強するから、學力が進む。

助詞は、概して後世ほど多様に發達してゐる。それは、上古語や中古語の助詞と現代語の助詞とを比較して見れば明かである。

七 助辭の解説 (五)

これから助動詞の事を説かう。助詞の分類においては、余の説はサンソム氏の "An Historical Grammar of Japanese" の説とはゞ一致してゐるが、助動詞の分類においては、

兩方の間に大いなる差異がある事を一言する。同氏は、我が國で通例いふ所の助動詞を、同書に次のやうに分類してゐる。

Suffixes as the compound conjugation verbs (動詞の副語尾たる接尾語)

1. Suffixes denoting voice (受身・可能又は尊敬の相を表はす接尾語)「らる」
2. Suffixes forming causative verbs (使役的動詞を形成する接尾語)「す、さす、しむ」
3. Suffixes denoting tense (時を表はす接尾語)「たり、ぬ、きけり、むめり、らむ、らし、べし、まじ、まし」
4. Negative suffixes (打消の接尾語)「ず、じ」

但し別に「やしまじ、たしごとし」を auxiliary adjectives (助形容詞)として形容詞の章に附説してある。また「なり(にてあり)たり(とあり)」を auxiliary verb (助動詞)の「あり」の合成語として助動詞の章に附説してある。

余は、助詞を「靜的助辭」とし助動詞を「動的助辭」として相對させて取扱ふこととする。さうして我が國語の助詞は、西洋語の前置詞などとは發達を異にしてゐるが、我が國語の助動詞もまた西洋語の助動詞などよりは遙かに複雑であり、その發達を異にしてゐる。總じて我が「助辭」は甚だ多種多様の發達をしてゐる。

余は、「動的助辭」即ち助動詞を理解する便宜のため「相」と「時」と「法」との三類に分けて説きたいと思ふ。これは西洋語法の voice, tense, mood に拘泥して云ふのではない。「相」とは、動詞に使役・受身・可能及び尊敬などといふ自他の觀念を添へることである。「時」と

は、動詞に過去・現在及び未來などといふ時の觀念を添へることである。「法」とは、動詞に指定・否定・希望及び推量などといふ思考の意味を添へることである。以上は單純に類を分けて見たもので、實際には種々の複合において表はれることが少からぬのである。以下に三類の助動詞を解説しよう。

【第一類】「相」の助動詞

第一類の助動詞
使役の助動詞

使役の助動詞 これは他に動作をさせる意のもので、文語には下二段の「す・さす・しむ」の三種があり、口語には文語の「す・さす」の變じた下二段の「せる・させる」の二種があり、「しむ」は殆どすたれた。「す」は四段とナ行變格とラ行變格との未然形に、「さす」はその他の活用の未然形に、「しむ」は總べての活用の未然形に連結し、また「せる」は四段の未然形に、「させる」は上二段と下二段とカ行變格とサ行變格との未然形に連結する。

使役の助動詞の前に來る動詞の客語につく助詞は、「に」「を」又は「をして」である。

母子に乳を飲ます(口語飲ませる)

父太郎を(太郎に)早く起きさせます(口語起きさせる)

頼朝は、二弟をして義仲を討たしむ(口語討たせる)

右の例において、「乳を」「義仲を」といふ客語は、「飲ま(飲む)」「討た(討つ)」にかゝり、「子

に「太郎を」又は「太郎に」「二弟をして」といふ客語は、「飲ます」「起きさす」「討たしむ」にかゝる。さうして「乳を」「義仲を」の「を」は、他動詞を支配する「を」である。「太郎を」の「を」は、自動詞を支配する「を」で、之を「太郎に」と言ひかへられる。この種の「を」は、「山を登る」「山に登る」「山を下る」「山より下る」の例のやうに「に」又は「より」とも言ひかへられるのである。印歐語などにおいては、屢々「を」格と「に」格とが同一形式を取ることを見るのである。日本語のみならず、その同族語と見られる言語にも、「に」に通ふ「を」があるけれども、全く同一ではなくて、「に」は靜止的又は歸着的であり、「を」は活動的又は進行的である。例へば「山に登る」といへば、山上といふ歸着點を示し、「山を登る」といへば、山上へと進行しつゝあることを示すが如きである。

我が内地の西部地方の方言には、左の表のとほりのサ行四段の使役の助動詞がある。

(動詞)	未然形	連用形	終止形	連體形	假定形	命令形
(讀ま)	ま(ぬ)	した	す	す(事)	せ(ば)	せ

右の助動詞の活用は、サ行四段の動詞の使役の意を含んだもののそれと同様である。例へば、

驚かす 驚かす 鳴らす 充たす 迷はす

の如きである。なほサ行下二段活用の動詞に使役の意を含んだものがある。例へば、

〔物を〕載す 〔馬を〕馳す 〔兵を〕伏す 〔身を〕寄す

の如きである。かやうな場合に、それが一つの動詞を構成してゐるか、又はその語尾か助動詞であるかは、一般には辭書によつて判斷するのが可い。なほ使役の助動詞が敬語の助動詞に轉用される事は、後に説かう。

受身の助動詞

受身の助動詞 これは他から動作をされる意のもので、文語には下二段の「る・らる」の二種があり、口語には文語の「る・らる」から變じた下一段の「れる・られる」の二種がある。

「る」は四段とナ行變格とラ行變格との未然形に、「らる」はその他の活用の未然形に連結し、また「れる」は四段の未然形に、「られる」は上一段と下一段とカ行變格とサ行變格との未然形に連結する。かやうに受身の助動詞の活用及び他の用言との連結の形式は、使役の助動詞のそれと兩々相似てゐる。

受身の助動詞の前に來る動詞の客語につく助詞は、「に」「より」又は「から」である。

鼠は猫に捕らる。(口語捕られる)

加害者被害者より訴へらる。(口語被害者から訴へられる)

右の例や、「私は盜賊に金を取られた」「盜賊が警官に捕縛された」などのやうに、我が國語では、有情の者が餘儀なく他から動作を受ける場合に受身を用ひるのが、通例である。

しかし「木が風に吹き倒された」「家が水に押し流された」などのやうに、非情の物の間に受身を用ひることもある。歐洲諸國語においては、非情の物が受身となるのは通例の事で、例へば、

「コロンプスはアメリカを發見した」とも「アメリカはコロンプスに發見された」とも云ひ、
「彼の人は私に英語を教へた」とも「私は彼の人から英語を教へられた」とも「英語が私へ彼の人から教へられた」とも云ふ。

近來は歐文直譯の感化を受けて、「沙翁の戯曲が坪内博士によつて邦譯された」とか「坪内博士によつて邦譯された沙翁の戯曲」などと、平氣で云はれるやうになつた。

受身になる動作は他動的であるから、受身の助動詞が他動詞につくのは當然の事で、歐文において他動詞の要件とする所である。しかしながら我が國語の受身の助動詞は、他動詞のみならず自動詞にもつくことが出来るのである。例へば、「子が泣く」「親が死んだ」「彌次馬が騒ぐ」などといふ自動詞の述語を、「子に泣かれる」「親に死なれる」「彌次馬に騒がれる」などと受身にして表はす習慣が存在してゐる。

なほ使役と受身とを併用して、「生徒が先生に作文を讀ませ(使役)られる(受身)」「父の教訓によりて正行は故郷の母の許へ歸らしめ(使役)られ(受身)たり」などといふ例があ

る。これを被役の助動詞と合稱する。

可能の助動詞

可能の助動詞 これは有意的に又は自發的に爲し得られる意のもので、文語には下二段の「る・らる」の二種があり、口語には下一段の「れる・られる」の二種がある。即ち、受身の助動詞の轉用であるが、可能の助動詞としての性質上、命令形を缺いてゐる。

可能の助動詞は、「人類は立つて歩かれる」「私は肉眼でそれが見られる」の例のやうに客語を要しない場合がある。これも受身の助動詞と異なる點の一つである。しかし「誰でも此の問題に答へられる」「あの子は學校に行かない」の例のやうに客語を要する場合もある。その客語につく助詞は通例「に」である。

自發的の意を含んで「昔の事が思はれる」「あの子の行末が案じられる」「新玉の年立ちかへる朝より待たるゝものは鶯の聲(素性法師)」などと云ふのも、可能の助動詞である。強ひて之を一種とするには及ばない。

上古には「昔しのぼゆ」「人に厭はゆ」の例の如くヤ行下二段の可能の助動詞もあつた。即ち「昔しのぼる」「人に厭はる」と同意である。今も「有らゆる人」「謂はゆる宋襄の仁」などの用例が残つてゐる。さうしてこの可能の意を含んだヤ行下二段の動詞も現存してゐる。

耳聞ゆ(耳聞かゆ) || 耳聞かるの意 (口語) 耳が聞える。

目見ゆ(目見らゆ) || 目見らるの意 (口語) 目が見える。

また可能の意を含んだラ行四段の動詞も現存してゐる。

血に染まる(血に染めらるの意)

天より授かる(天より授けらるの意)

また四段の動詞が可能の意を含んで下一に轉じたものもある。

文字が讀めます(文字が讀まれますの意)

遠くは走れない(遠くは走られないの意)

なほ可能の意を表はすため、現に用ひられてゐる幾多の方法をあげて見よう。

(1) 動詞の「得」を用ひる例、「讀むことを得」「選舉する[こと]を得」など。

(2) 動詞の「得」を英語の助動詞 *may* の意に用ひて、前の動詞の連用形に連結する例、「讀み得る」「選舉し得る」など。

(3) 副詞の「え」を用ひて可能の否定を下に表はす例、「え見つけ奉らず」など。この「え」は「善」の意であらうが、また「得」の字を當てて、「得讀まぬ字」などと書いてゐる。方言では「えう見つけませぬ」「えう讀まぬ字」などと云ふ。「かざし抄」には「え」を「どうも」と譯してある。

(4) 上一段の動詞「できる」「出来る」を用ひる例、「行かれる」「行くことが出来る」と

いひ、「起きられない」を「起きることが出来ない」といふ類である。

(5) 四段の動詞の「能ふ」を用ひて可能の否定を下に表はす例、「讀むこと能はず」「言ふこと能はず」など。

右のやうに「能はず」と否定の場合に用ひるのが古來の用例であるが、近來は英語の can 及び can not の如き歐文直譯の感化を受けて、往々「讀み能ふ」「讀み能はぬ」「言ひ能ふ」「言ひ能はぬ」などと用ひる例がある。

(6) 推量的指定の助動詞の一つである「べし」を轉用して可能を表はす例、文語の「その銳利、鐵をも斷つべし」の如きは、之を口語にすれば「その銳利は、鐵でも斷たれる」とすべきである。「べし」は「べからず」と打消して可能の否定を表はすことが出来る。唐詩の「秋聲不可聞」の如きが、これである。

敬語の助動詞 これは他に對して尊敬をあらはす意のもので、(一)使役又は可能の助動詞を轉用するものと、(二)敬語の動詞を轉用するものと、(三)特殊の助動詞を用ひるものとある。

(一)は、使役の意味又は可能の意味が、轉じて敬語の意味となつたものである。即ち文語には、「す」又は「さす」と「る」又は「らる」と「しむ」との五種が、單獨もしくは複合で用ひ

られ、口語には、「れる」又は「られる」が單獨で用ひられ、「せる」又は「させる」と「られる」とが複合で用ひられる。左に、その文語(上記)と口語(下記)との例を對照する。

陛下、侍臣に宣はす。

陛下が侍臣に宣はれる。

姫君、琴を弾ぜさす。

姫君が琴を弾ぜられる。

父は書畫を好まる。

父は書畫を好まれる。

母、我等を誡めらる。

母が我等を誡められる。

二人共に政を執らしめ給ふ。

二人が共に政を執らせられる。

君も泣かれ給ふ。

君も泣かせられる。

主上、政を統べさせらる。

主上が政を統べさせられる。

東宮、皇位を繼がしめらる。

東宮が皇位を繼がせられる。

上古の敬語の助動詞には、「魚乞はさば」「國造らしし大神」「弓を執らす」「初國知らす天皇」「語れ語れと詔らせこそ」「名宣らせ」のやうに、サ行四段の「す」が用ひられた。これを下二段の敬語の助動詞「す」と比較すれば、

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
(四 殿)	さ	し	す	す	せ	せ
(下 二)	せ	せ	す	する	すれ	せ(よ)

(二)敬語の動詞を轉用するものには、左の例のやうに、單獨のもの、他の敬語の助動

詞又は接頭語とを併用するものがある。上記は文語で、下記は口語である。

高天原に成ります。	高天原にお現れになる。
天皇即位したまふ。	天皇が御即位になる。
天皇行幸せしめ給ふ。	天皇が行幸あそばされる。
御覽じたまふ。	御覽になる(又は御覽なさる(又は御覽下さる。))
讀ませたまふ。	お讀みになる(又はお讀みなさる(又はお讀み下さる。))
行幸なる。	行幸になる。

右の口語の「になる」「あそばす」は四段に活用する。「なさる」と「くださる」とは四段に似た活用をするが、通例その連用形を「なさいます」「下さいます」、命令形を「なさい」「下さい」とイ音便にいふ。

なほ、敬語の動詞の轉用された敬語の助動詞に、中古語の「侍り」や「候ふ」などがある。「侍り」はラ行變格に、「候ふ」は四段に活用する。「候ふ」は今も尙、候文體において用ひられてゐる敬語の動詞又は敬語の助動詞である。

(三)特殊の助動詞を用ひるものに、文語の「給ふる」や口語の「ます」がある。文語の「給ふる」は平安朝語に用ひた鄭重の意の詞で、下二段に活用する。口語の「ます」も元は他の語の轉用されたものであるが、その語原に異説がある程に語原から離れて、専ら敬語の助

動詞として用ひられてゐる。その語原は、或は文語のと同じく、上古語の敬語動詞「坐す」の轉用とし、或は中古語の敬語「參らす」(動詞と助動詞)か、或は「申す」(動詞)の音韻變化した轉用とし、或はそれらの合流だとも見られるのである。口語の「ます」は、他に對して尊敬又は鄭重の意を表するための助動詞で、その活用は、文語の尊敬の助動詞「ます」(四段)とは異なり、特殊なる二種の活用が有つて頗る複雑である。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
〔文語〕	たまへ	たまへ	たまふ	たまふる	たまふれ	たまへ
〔口語〕	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ(甲)
	ませ	まし	まする	まする	ますれ	ませ(乙)

口語では(甲)の活用が標準として優勢である。その未然形の用例は「有りませう」、「有りませぬ」であり、「有りませない」は用ひられない。命令形の用例は「下さいませ」、「下さいまし」の兩方とも可いとされてゐる。

八 助辭の解説 (六)

【第二類】「時」の助動詞

時の觀念には、現在を中にして、前には過去があり、後には未來がある。さうして動詞

現在

や形容詞や「相」の助動詞などの終止形は、現在をあらはすと云はれるが、その現在といふのは甚だ漠然としてゐる。

- (1) 雪は白し。月は清し。花は美し。
- (2) 夏は暑く、冬は寒し。
- (3) 余は常に、朝は五時に起き、夜は十時に臥す。
- (4) 正直の頭に神やどる。
- (5) 地球は太陽を中心として廻る。
- (6) 二と三との和は五なり。
- (7) すべての生物は死するものなり。
- (8) 會規に従はざる者は之を除名す。
- (9) 明治二十二年大日本帝國憲法を發布し給ふ。
- (10) 和銅五年古事記成る。
- (11) 大地は揺れる家は倒れる人は叫ぶ……それは大變でした。
- (12) 天明く。曉氣清し。進め、撃て。の號令あり。喇叭の聲起る。
- (13) 明日晴天なれば、我々は遠足します。

不定時性

右のうち(1)乃至(8)の如く事物の性質や状態や習慣や眞理や原則や法規は、現在のみにならず、過去にも未來にも通ずるものだけでも、之を言ひあらはすのには用言の終止形を以てする。かやうに一定の時を限らぬ現在を不定時の現在といひ、或は常住の現在とい

定時性完了
と存在と進
行

ふ。また(9)(10)の如く、既に過去となつた歴史上の事實をも、現在の時と同じ様に凡そ用言の終止形を以て言ひあらはす。これを歴史的現在といふ。また(11)(12)の如く、過去の物事をも恰も現に見聞するやうに寫し出すことがある。これは修辭上の一詞藻であつて、現寫法(Vision)とよび、或は修辭的現在といふ。また(13)の如く、ある物事、例へば「遠足」が未來に起ることが確定的である場合には、現在の時と同じ様に凡そ用言の終止形を以て言ひあらはすこともある。

右のやうに、用言の終止形を以てあらはす「時」は、必ずしも現在ばかりでなく、さうして現在である場合も不定時性である。それが完了的現在または存在的現在または進行的現在である場合に、定時性を持つのである。例へば、

	(文語)	(口語)
現在	増す。	増す。
現在完了	(イ) 増しつ。 (ロ) 増しぬ。 (ハ) 増したり。 (ニ) 増せり。	増した。

また(ハ)(ニ)の如きは、口語の存在的現在または進行的現在の「増してゐる」などの意味

に用ひられる。

さて「たり」「り」の如きは、元は多くは存在的現在または進行的現在の意味に用ひられ、時としては現在完了の意味にも轉用され、また後世には過去をも意味されるやうになつた。存在的現在の場合に「花咲きをり」「梅が枝に來きるき」机の上に置きあり、進行的現在の場合に「船を岸に寄せつゝあり」などと云ふ文語もある。「雪がふりつゝある」といふが如きは、必ずしも歐文直譯の語とは限らない。

東京語の「てゐる」は、存在的現在のみならず進行的現在をも表はすもので、兩方の區別が往々不明であるが、關西語では兩方の區別が左のやうに言ひわけられる。

(東京)

(關西)

存在的現在

雪がふつてゐる(又は、てをる)。 雪がふつとる。
水が増してゐる(又は、てをる)。 水が増しとる。

進行的現在

雪がふつてゐる(又は、てをる)。 雪がふりをる。
水が増してゐる(又は、てをる)。 水が増しをる。

右の中、日常の口語においては、また「てゐる」を「てる」ともいひ、「ふりをる」「増しをる」を「ふりよる」「増しよる」ともいふのである。また「柿が盆に載せてある」その事は揭示に書いてある「の如き存在的現在の言ひ方は、東京語も關西語も同じである。

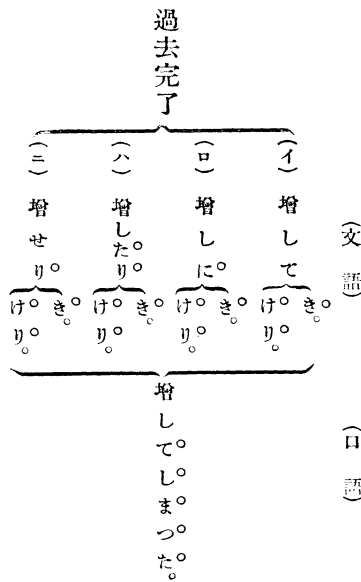
文語で現在完了をあらはす古例の「つ」「ぬ」について一言しておく。東條義門の「活語指南」に「明かしつ。」「明けぬ。」「暮しつ。」「暮れぬ。」のやうな例をあげ、足代弘訓の「ぬるつる捷覽」に「あけぬ。」「あはせつる。」「あひぬる。」「ありつる。」のやうな例をあげてあり、從來幾多の説が出てゐる。その概要をいへば、凡そ「つ」は他動詞をうけ、「ぬ」は自動詞をうけるやうに説くのであるが、この説き方には随分例外を置かねばならぬのである。さうして「ぬ」が自動詞をうけない例外は少いけれども、「つ」が他動詞をうけない例は、「有りぬる」「有りつる」など、可なり多くある。

そこで、もつと適當に云へば、「つ」は有意的または活動的であり、特に語感を強める場合もあり、「ぬ」は自然的または状态的であり、特に語感を緩める場合もあると言ひ得るやうである。例へば「水を増しつ。」「水増しぬ。」「夜を明かしつ。」「夜明けぬ。」「時鳥鳴きつる。」「方なむれば」「旅寝しぬべし」などの如きである。

現在に接觸する一定時の過去は、謂はゆる完了で、前に示したやうに「つ」「ぬ」又は「たり」「り」を以てあらはす。現在に接觸せず、廣く不定時の過去であるものは、謂はゆる過去で、「き」又は「けり」を以てあらはす。例へば「昔、男ありけり。」「古にありき。」「知らねども」の如きである。現代の口語では、完了も過去もすべて「た」であらはす。これは文

語の「たり」の變形した「た」である。

さて古代語または文語においては、過去と完了とが複合したものの即ち過去完了は、左の如き幾多の形式を以てあらはされる。



右の(ハ)(ニ)の如きは、口語で「増してゐた」または「増してあつた」などといふ進行的過去または存在的小過去にも用ひられる。左に過去完了、存在的小過去または進行的過去の例を、文語と口語との對照で示す。

- 一、言ひてき。
- 二、悪しう言ひてけり。
- 三、え參らずなりにき。
- 言つてしまつた。
- わるく言つてしまつた。
- 參られなくなつてしまつた。

四、待ちし櫻もうつろひにけり。 ○ 待った櫻も色がかはつてしまつた。

五、道に物をすてたりき。 ○ 道に物をすててあつた。

六、海へさつとぞ散つたりける。 ○ 海へさつと散つてしまつた。

七、たのめりし子。 ○ たのみとしてゐた子。

八、そこに立てりける梅の花。 ○ その所に立つてゐた梅の花。

「けり」については尙特にいふべき事がある。元來「けり」は「きあり」の約であると云はれ、過去における進行又は存在を意味したものである。さう云ふ場合もある。例へば竹取物語に、

竹を取りつゝ萬づの事につかひけり。 ○ 竹を取つては色々の事につかつてゐた。

さうして「けり」は、過去時をあらはす外に、感動をあらはすことが少くない。例へば、古今集に、

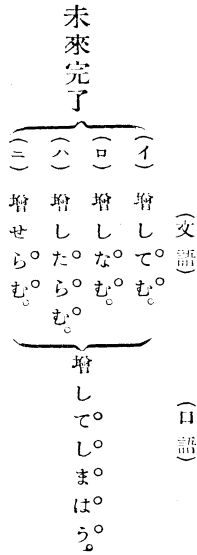
み山には松の雪だに消えなくに、都は野べの若菜つみけり。遠鏡に「若菜をつむわい」と譯してある。

たれこめて春の行くへも知らぬまに、待ちし櫻もうつろひにけり。遠鏡に「待った櫻もうつろうてしまつたわいの」と譯してある。

未來の時の助動詞は、文語には「む」の一種があり、口語には「う」及び「よう」の二種があり、何れも廣く不定時の未來をあらはす。しかし、それが轉じて「今は吉野山の櫻さかり

ならむ。」(さかりであらう。)の如く推量の意にも用ひられる。文語の「む」は、音便で「ん」と書く習慣が中古からある。

さて古代語または文語においては、未來の助動詞と完了のそれとが複合したものが即ち未來完了は、左の如き幾多の形式であらはされる。



右の(ハ)(ニ)の如きは、口語で「増してゐよう」「または「増してあらう」などといふ存在的未來または進行的未來にも用ひられる。左に未來完了、存在的未來または進行的未來の例を、文語と口語との對照で示す。

- 一、龍リウあらば射殺して首の玉取りてむ。○龍がゐたら射殺して首の玉を取つてしまはう。
- 二、いざ櫻、われも散りなむ。○どれ櫻よ、おれも共に散つてしまはう。
- 三、日さむるまで寝ねたらむ。○日のさめるまでねてゐよう。
- 四、後には名高き人となれらむ。○後には名高い人となつてゐよう。

文語と口語とは、必ずしも同一法で意譯されるものでなく、左の例のやうな言ひ方のち

がひもある。

過去未來

一、櫻花今日よく見てむ。 ○ 櫻花を今日はよく見ておかう。

二、散りなむ後ぞこひしかるべき。 ○ 散つてしまつた後こそ「その人が」したはしからう。

三、御刀しばし貸したまへらむ。 ○ 御刀を暫くお貸しくだされたい。

なほ、過去の推量または想像、即ち「過去未來」といふべきものがある。その例は、

一、亡き人も思はざりけむ(思つてゐなかつたらう)。

二、この木は江戸城の築かれし前より生えたりけむ(生えてゐたらう)。

三、先年の大震火災の時、もし彼の被服廠跡に居たりしならば、焼け死にたりけむ(焼け死んでゐたらう)。

時の圖表

左にイエスペルゼン氏の「語法哲學」(Jespersen: Philosophy of Grammar)における「時」

の圖表を修補して、「時」の表現の方法を充當して見よう。(例は「雪ガ降ル」を基本とする。

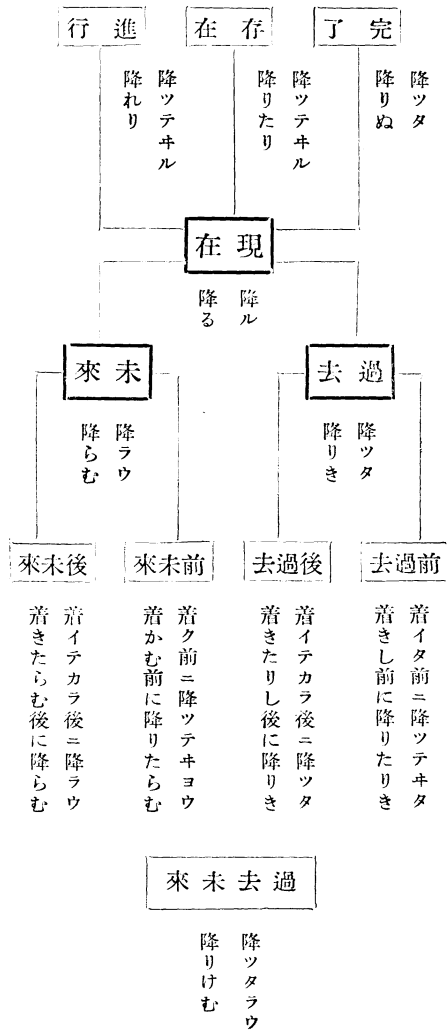
文語は平假名交り、口語は片假名交り)

(注意) 時の助動詞は、王朝時代の國語においては後世より詳細に言ひ分けられた。近

古以後の國語は大いに變遷して、時の助動詞に、昔と今とで著しく繁簡の差が出来た。

我が時の語法は必ずしも一定してゐない場合があり、特に近古以來言文二途の時代には、

王朝の言文一致の時代の如き時の語法は正しく行はれなくなつた。



右の圖表を一縦線において示せば、左のやうな形式となるであらう。



時の助動詞の古今を比べて見るに、王朝時代のは諸種の表はし方が凡そ整つてゐたが、平安朝末期から漸次簡易化されて、現代口語のやうな有様となつてゐる。

九 助辭の解説(七)

第三類

指定の助動詞

【第三類】「法」の助動詞

この類の助動詞には、豫て説いておいたやうに、指定・否定・希望・推量・比況などといふ思考をあらはす助動詞を屬せしめることとする。

指定の助動詞 は、物事を指し定める意の助動詞で、文語には「なり」と「たり」との二種があり、口語には「だ」及び「だ」に代る「である」や「です」などがある。「です」の如きは、「だ」を丁寧にいひかへる語である。指定の助動詞は、「武人なり」「大將たり」「武人だ」「大將だ」のやうに、體言に連続する特徴がある。「なり」は「にあり」の約、「たり」は「とあり」の約である。「なり」は「幸福を得るなり」のやうに用言の連體形に連続し、また「これのみなり」のやうに助詞にも連続する。「だ」の類は、「得るのだ」「得るのです」のやうに、用言の連體形との間に助詞の「の」をはさみ、また「こればかりだ」のやうに助詞に連続する。

指定の「なり」と相似た感動即ち詠歎の「なり」がある。指定の「なり」は、用言の連體形に連続し、感動の「なり」は、動作を言ひ終つたときに動詞又は助動詞の終止形に連

は之を推量の條で説く事とする。

否定の助動詞 は、物事を打消す意の助動詞で、文語には「ず」「じ」「まじ」の三種があり、口語には「ぬ」「ない」「まい」の三種がある。文語の「ず」は動詞「有り」と結合して、「ざらば」「ざりけり」「ざる事」「ざれば」「ざれ」のラ行變格となる。「じ」は未來の否定を表はし、「まじ」より強い意味を持つけれども、「まじ」と同様に口語では共に「まい」と言ふ。口語の否定の「ない」は、蓋し形容詞の「無い」を轉用した助動詞で、謂はゆる日本アルプス以東で普通に行はれてゐる。東京人などの中には、「ない」をなまつて「ない」といひ、「まい」をなまつて「めい」ともいふ。「まじ」と「まい」とは、その前に來る動詞の活用形に、左の如き異動がある。

文語「まじ」の前に來る動詞は終止形。但し、ラ變だけは連體形。

口語「まい」の前に來る動詞は、四段は「害くまい」「有るまい」の如く終止形、上一段下一段カ變ナ變は「起きまい」「受けまい」「こまい」「しまい」の如く未然形。

左に肯定に對する否定の形式の例を示さう。(片假名交りは口語)

讀ます	讀マセル	讀ませず	讀マセナイ(セス)
讀まる	讀マレル	讀まれず	讀マレナイ(レス)
讀みき	讀ンダ	讀まざりき	讀マナカッタ(ナンド)

希望の助動詞

希望の助動詞

は、物事をねがひのぞむ意の助動詞で、文語には「たし」の一種があり、口語には「たし」の系統である「たい」の一種がある。文語または口語の連用形の「たく」は、動詞「有り」と結合して、「行きたからむ」「行きたからう」「行きたかりき」「行きたかつた」などとなる。

希望の助動詞「たし」は、近古以來發達したもので、元は「めでたし」「こちたし」の如き一種の接尾語から發生したもののやうである。王朝では「ほりす」「まくほし」またはその融合した「まほし」の如き言ひ方で希望を表はしたのであるが、平家全盛のころの月詣和歌集に「聞きたしや宿をたどりて泣く涙」とある如き助動詞的のものが現れてきたのである。徒然草は中古隆盛期の作に倣つた書物であるが、その「有りたき事」などといふ語法は、近古の特徴を示すものである。中古風に言へば「有らまほしき事」などといふべきである。

讀みけむ	讀ンダラウ	讀まざりけむ	讀マナカツタラウ(ナンダラウ)
讀む	讀ム	讀まざ	讀マナイ(ヌ)
讀まむ	讀マウ	讀まじ	讀ムマイ
讀みたし	讀ミタイ	讀みたからず	讀ミタクナイ(タウナイ)
讀むなり	讀ムノダ	讀まざるなり	讀マナイノダ(ヌノダ)
讀むならむ	讀ムダラウ	讀まざるならむ	讀マナイダラウ(ヌダラウ)

なほ「死にたくもない」の如きを、音便で「死にたうもない」といひ、更にこれを短縮して「死にともない」といひ、「花咲いて死にともないが病かな」の如き來山の句もある。

推量の助動詞

は、物事をおしはかる意の助動詞で、文語には「けむ」「まし」「めり」「らし」「らむ」「べし」などがあり、口語には「たらう」「やうだ」「らしい」「だらう」などがある。なほ文語の未來の「む」、口語の未來の「う」「よう」は推量に轉用され、文語の否定の「じ」「まじ」、口語の否定の「まい」は推量をも兼ねてゐる。

まづ「けむ」「たらう」は、過去の推量に用ひ、「何れの御時にかありけむ」(源氏物語)「鐵砲は何時頃我が國に渡つたらう」などといふ。また「けむ」を「しならむ」といふ複合の助動詞にかへて言ふこともある。

「まし」は、假定の推量に用ひ、「一つ松、人にありせば、太刀はけましを」(古事記)などといひ、また呼應的に之を反覆しても云ふ。例へば、

凡そ保元平治よりこの方のみだりがはしきに、頼朝といふ人もなく泰時といふ者も無からまし。かば、日本國の人民はいかゞなりなまし。(神皇正統記)

口語では「之を一つ松が人で有つたなら、太刀をはかせようものを」「……無かつたら、日本國の人民はどうなつてしまつたらう」などと言ふ。また輕き願望を含めて未來の

意を表はすこともある。例へば「をりすぎばさてもこそやめ、五月雨のこよひあやめの根をやひかまし」(和泉式部日記)の如きである。

「めり」は、現に物事がさう見えると推定して傍觀的にいふ意で、實は直接にさう言ひ得る事をも婉曲に言ふ古風な言ひ方である。あゆひ抄には「めりは大かたなりとよむに似ていさゝかたがふべし。なりは近く見聞くことを定かによむ詞なり。めりはその大むねをしはかりて、つかねいふ意あり。里におもむきちや、様子ぢやなどいふに似たり。」と説いてある。例へば、

立田川もみぢみだれて流るめり、渡らば錦なかやたえなむ古今集

遠鏡に「立田川ハ紅葉ガチリミダレテ今最中流さきゆうルヤウニ思ハレル」云々と譯してあるのは、あゆひ抄の「様子ぢや」よりまはりくどい。サンソム氏の「日本語の歴史的文法」には、「めり」は時として “seems to be” の意を表はすこともあるが、一般には、さう譯するほどのものではなく、たゞ文學上の一形式だと思はれると説いて、立田川もみぢみだれて流るめり」を斯う譯しある。

Down the River Tatsuta the autumn leaves float helter-skelter.

「めり」は、宇津保物語の「人もなきなめりと思ひ」源氏物語の「こがらしに吹きあはず

める。笛の音、大鏡の「翁一人、嬬ときあひて、同じ所に居ぬめり」などと、中古に常に用ひた語である。

「らし」「らしい」は、間接的に又は聯想的に認める意で、多少の疑を含めた語である。例へば「この川のみぢば流る、奥山の雪げの水ぞ今まさるらし」。(古今集)、「松の音に風のしらべをまかせては立田姫こそ秋はひくらし」。(後撰集)など。

「らむ」「だらう」は、想像的または疑惑的に考へる意の語である。例へば「ほととぎすの蔭にかくるらむと思ふにをかし」。(枕草子)、「久方の光のどけき春の日に静心なく花のちるらむ」。(古今集)など。

「べし」は、推し量つて指定する意の語で、推量すると共に指定する意があり、更に可能や義務や命令などの意に轉用される。あゆひ抄には、「べしは、斯くありてよき程なりと量り定めていふ詞なり。里にころほひなどいふほどの意なり。まさしくあてんには、心えてねばならぬといひ、はずといひ、そな(さうな)といふ。又ことがあるなどの里言たがひに得たる所あり。」と説いてある。例へば、

(推量的指定) わがせこが来べき宵なり、さゝがにのくもの行ひ今宵しるしも。(日本紀)

(可能) よそにのみこひやわたらむ、白山のゆき見るべくもあらぬ我が身は。(古今集)

(義務) 國民はその國法を護るべし。
(命令) 裁判所に出頭すべし。

なほ「べし」の意を種々擴張して用ひた例をも挙げられるのだが、凡そ此位に止めておく。サンツム氏の「日本語の歴史的文法」には、「べし」は 'may', 'must', 'shall', または '三三二' で夫々譯することを得る、未來の觀念をあらはす所の助形容詞だと説いてある。

「べし」は主として文語に用ひられてゐるのだが、口語にも、「斯うあるべきだ」「實行すべき事」「然るべく願ひます」などと幾分は用ひてゐる。文語において「べく」は「あり」と結合して「べかり」となり、「べからず」「べからむ」「べかりけり」「べかるらむ」「べかれど」などと活用されてゐる。「べからむ」「べかれど」は變形して「べけむ」「べけれど」となつてゐる。

以上に述べたやうに、我が國語の推量の助動詞は多種多様である。

比況の助動詞

比況の助動詞 は、他の物事にたとへる意の助動詞で、文語には「ごとし」の一種、口語

には「やうだ」の一種を挙げられる。「あゆひ抄」には、「ごとし」を「芝狀しさま」の詞(形容詞)として、その語幹の^〇を詞の上に置かぬものだから、脚結に附けて出したと云つてある。山田博士の日本文法論には「ごとし」を形式形容詞として別に取扱つてある。こゝ

には現今普通の分類に従つて之を助動詞としておく。「やうだ」は、時として推量の意にも用ひられる。

「ごとし」も「やうだ」も、助詞「の」をはさんで、間接に體言に連り、また直接に用言の連體形に連る。但し、「ごとし」は助詞「が」をはさんで、間接に用言の連體形に連ることが多い。例へば、

彈丸雨の如し。

年月は流るゝ如し。

碁石を並べたるが如し。

魚に水無きが如し。

彈丸が雨のやうだ。

年月は流れるやうだ。

碁石を並べたやうだ。

魚に水の無いやうだ。

なほ「ごとし」の語幹である「ごと」(如)は、古くは「神の如」「我が戀ふる如」のやうに、「如く」と同様に用ひられてゐる。

以上に助辭の二大部たる助詞と助動詞とを述べたのである。が、時として誤つて助辭と混同されることのある接尾辭について一言したい。

接尾辭は單語の構成要素の一種であつて、名詞や數詞や代名詞や動詞や形容詞や副詞の構成に於ける下部の不獨立の小詞である。例へば、名詞の「親たち」「子ら」「家來ども」「殿がた」「重み」「高さ」の如き代名詞の「僕たち」「汝ら」「私ども」「あなたがた」の如き、

接尾辭

動詞の「春めく」「高まる」「學者ぶる」「黄ばむ」「嬉しがる」の如き、形容詞の「睡たし」「男らし」「露けし」「隔てがまし」の如き、副詞の「道すから」「憚ながら」「一人づつ」「年ごと」「嬉しげ」の如き諸語の接尾辭である。なほ「一つ」「二つ」のつ、「花々しい、毒々しい」のしい、「案じる、煎じる」のじる（元は爲る）、「御座る、彌次る」のる（元は有る）なども、接尾辭である。

之を要するに、接尾辭のみならず、助詞も助動詞も、概して不獨立の小さいことば即ち「辭」といふべきものである。しかし「辭」であるとはいへ、我が語詞の運用に千變萬化の妙を與へる重要素であり、すべて後置の形式において一絲みだれないものである。「言靈のさきはふ」とは、その妙用をほめたゝへるために用ひたいと思はれる語である。

一〇 助辭の鍛錬

言語の習得は、觀念を明確にし思想を豊富にするに必要である。言語習得の多少は、心意發達の如何を計るのに大切な標準となる。そこで幼年から少年、青年、それから壯年に至る間の言語習得の計算が、幾多の心理學者又は教育家等によつて行はれて居る。さうして計算の記録は、實驗者の方法及び被實驗者の如何によつて差異を生じてゐる。それに就

いて早く我が國民に於ける標準的の計算記録を見るに至ることを望む。

松本亦太郎氏の「智能心理學」に、參考すべき計算の實例を示された所を略抄すると、次の如くである。久保良英氏の子息についての語彙の記録は、二歳一六五、三歳四六一、三歳半七〇一、四歳九八一、五歳一二三七、六歳一三六四である。澤柳政太郎氏ら調査の初入の小學兒童の語彙は約四千である。米國でカーク・バトリック氏が調べた六歳以上(中數年齢)の者の語彙は、六歳半二五〇〇、七歳半二六〇〇、八歳半三九六〇、九歳半五〇〇〇、十歳六分六〇〇〇、十一歳半六一〇〇、十二歳四分七七〇〇、十三歳八八〇〇である。又同氏とローザノッフ氏とが調べた語彙の記録は、十四歳九〇〇〇、尋常成人一一七〇〇、優等成人一三五〇〇、師範學生一九〇〇〇、大學生二〇一二〇である。

右の記録について考へて見ると、語彙の増加の割合は年齢の増加に對して不規則な比率を示してゐる。さうして幼年から少年に至る時期の語彙増加の割合の多いのに比べて、青年から成人に至る時期の語彙増加の割合は少くなつてゐる。また尋常成人の語彙と優等成人のそれとの開きの如きは、餘りに少いやうに思はれる。かやうな記録は我等に何を考へさせるのであるか。特に國語教授に對して如何なる原理原則を暗示してゐるのであるか。かねてから心理學は、幼年期から少年期、青年期、それから成人期へと、漸次記憶作用の

盛な時から想像作用及び推理作用の盛な時へ遷ると云ふ。これは言語教授において如何なる考慮をさせるものであるか。これを國語について考へて見るに、記憶作用の旺盛は、主として種々の單語の習得の多大であることを意味し、想像作用及び推理作用の旺盛は、單語特に助辭の使用の自由自在であることを意味するのである。何となれば、助辭は種々雜多の單語を聯結し配合し統括し縱横無盡に運用させる所の我が國語中の心理的重要素であるからだ。それで國語教授の成績を擧げるために、助辭の鍛鍊は實に大切な事である。前に掲げた優等成人と尋常成人との語彙の數の比較において一〇〇％に對する八六％といふ開きの如きは、たゞ單語の記憶の優劣のみと見ては餘りに開きが少い。その優劣の差等は、より多く他の方面即ちその單語を處置する所の語、我が國語で云へば助辭、それは單語の數としては比較的少數のものゝの運用如何に存すると推定すべき理由があるのである。

また徳富蘇峯氏が前かた現代文章の不確實やら無頓着やらを難じた言説の一端を「國語改良異見」の中から引證しても、助辭の鍛鍊の大切な事が分らう。曰く『その文章に「斯くある」と書かれた意味が、「ありたき」ことやら、「あらねばならぬ」ことやら、「あり得べき」ことやら、「あつた」ことやら、一切その邊の區別が分明しない……「甚だ」でも「聊か」でも、「可し」でも「如し」でも、何の分別なしに使用してゐる……一寸見れば「信ず」と云ふも「信

せんと欲す」と云ふも、何の差別もない様なれど、「信す」とは、全くその通りに信するの
で、「信せんと欲す」とは、信じたい、併し聊か疑惑も無いではない、若しくは前後の文勢
如何によつては、信じたい、併し信することは難からうとの意義になることも無いとは限
られぬ。杜子美が細に文を論すと云ふは、此邊の意味をも含ませて居るのであらう。文學
的良心ある者は、是非斯くなくてはならぬ。』とは、もつとももの事。これは國語を教授する
に就いて大いに心がけねばならぬ事である。

國民教育における漢字の整理及びその教授法の如きは、かねてから考慮されてゐる。即
ち、先づ假名文字を教へておいて、それから學習者の心意發達の過程に適應し得るやうに
と、漸進的に組織的に、少量から多量へ、易きから難きへ、簡から繁へと排列されてゐる。
これは誠に結構な事。かやうな結構さを國語法の重要素の整理及びその教授の上にも實現
されるやう努めたいものである。これは單に讀方即ち講讀の教材のみに望むべきでは無い、
綴方即ち作文や、話方即ち談話の練習においても、指導し啓發し補充し統制すべき重要な
事である。